ONO Kazushi

Music Director

音楽監督 大野和士

1/10 1/18 1/20

1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者（現・桂冠指揮者）、バーデン州立歌劇場音楽総監督、ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。現在、都響およびバルセロナ響の音楽監督を務めている。2016年9月に新国立劇場オペラ部門芸術参与へ就任、2018年9月に同劇場芸術監督へ就任予定。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。

2017年5月、大野和士が9年間率いたリヨン歌劇場は、インターナショナル・オペラ・アワードで「最優秀オペラハウス2017」を獲得。自身は2017年6月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra and Barcelona Symphony Orchestra. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. Ono was appointed Artistic Consultant of Opera of New National Theatre, Tokyo in September 2016, and will be inaugurated as Artistic Director of Opera of the same theatre in September 2018.

B Series

第846回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.846 B Series

サントリーホール

2018年1月10日(水) 19:00開演

Wed. 10 January 2018, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大野和士 ONO kazushi, Conductor

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

R.シュトラウス：組曲《町人貴族》 op.60 (35分)

R.Strauss: Der Bürger als Edelmann, suite, op.60

Ⅰ Ouverture zum 1. Aufzug (Jourdain - der Bürger)	第1幕への序曲(ジュルダン−町人)
Ⅱ Menuett	メヌエット
Ⅲ Der Fechtmeister	剣術の先生
Ⅳ Auftritt und Tanz der Schneider	仕立て屋の入場と踊り
Ⅴ Das Menuett des Lully	リュリのメヌエット
Ⅵ Courante	クーラント
Ⅶ Aufritt des Cleonte	クレオントの登場
Ⅷ Vorspiel zum 2. Aufzug (Intermezzo) (Dorantes und Dorimene – Graf und Marquise)	第2幕への前奏曲(間奏曲) (ドラントとドリメーヌ−伯爵と公爵夫人)
Ⅸ Das Diner (Tafelmusik und Tanz des Küchenjungen)	饗宴(食卓音楽と料理人たちの踊り)

休憩 / Intermission (20 分)

ツェムリンスキー：交響詩《人魚姫》 (45分)

Zemlinsky: Die Seejungfrau

Ⅰ Sehr mäßig bewegt	きわめて適度な動きをもって
Ⅱ Sehr bewegt, rauschend	とてもよく動いて、ざわめくように
Ⅲ Sehr gedehnt, mit schmerzvollem Ausdruck	きわめて広がりをもって、苦悩に満ちた表現で

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業) 文化庁

シリーズ支援：明治安田生命

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

R.シュトラウス：組曲《町人貴族》op.60

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は作家フーゴー・フォン・ホフマンスタール（1874～1929）の台本によるオペラ『ばらの騎士』の初演（1911年1月26日）の大成功を受けて、ホフマンスタールとこれを演出したマックス・ラインハルト（1873～1943）とともに次の企画に乗り出した。

それは、17世紀フランスの劇作家モリエール（1622～73）のコメディ・バレエ『町人貴族』［バロックの作曲家ジャン＝バティスト・リュリ（1632～87）の音楽付きで1670年に初演］に新たに曲を付けるとともに、第３幕で成り上がり貴族の主人公ジュルダンが招待客に見せる劇中劇として、神話の悲劇とドタバタ喜劇を融合させたホフマンスタール台本のオペラ『ナクソス島のアリアドネ』を加えるという企画だった。

この計画に沿って1911～12年にシュトラウスは劇音楽と劇中劇オペラを作曲、こうして装い新たになった『町人貴族』は1912年10月25日シュトゥットガルトで作曲者の指揮、ラインハルトの演出で初演されたが、芝居とオペラを繋ぎ合わせた点に無理があり、不評に終わる。

そこでシュトラウスとホフマンスタールは、劇中劇を独立させ、その前にプロローグを付加した単独のオペラ作品に改作した。これが今日『ナクソス島のアリアドネ』として知られるオペラで、1916年10月４日ウィーンで初演された。

一方、劇のための音楽は、モリエールの原作をホフマンスタールが改作した形の上演で再度用いられることとなる。その際、シュトラウスは当初の曲に加えて1917年に新たに曲を追加し、この劇は1918年４月９日ベルリンで初演された。

この劇音楽はモリエール劇に相応しく、切りつめた編成による擬バロック風の書法によっている。シュトラウスはさらにその中から以下の９曲を選び、組曲《町人貴族》を編んだ。第５～７曲は1917年に追加された音楽からとられている。

第１曲　第１幕への序曲（ジュルダン－町人）　楽天的な楽想（ピアノと弦合奏）、尊大な管楽器群の動機、軽薄なトランペットの旋律などが成り上がり貴族ジュルダンを描写する。一転、後半はオーボエが優美な旋律（『ナクソス島のアリアドネ』プロローグに転用）を歌う。

第２曲　メヌエット　ジュルダンの踊りの稽古場面でのロココ調の曲で、弦の伴奏上に２本のフルートが舞う（この楽想も『ナクソス島のアリアドネ』プロローグに転用）。

第3曲　剣術の先生　金管とピアノの大仰なやり取り等のユーモラスな描写はシュトラウスの独壇場。後半は一転、急迫した音楽となる。

第4曲　仕立て屋の入場と踊り　軽やかな楽想で仕立て屋が登場、低弦の持続低音も利いている。続くポロネーズ風の踊りでは独奏ヴァイオリンが活躍。

第5曲　リュリのメヌエット　第2幕の前奏用として1917年にリュリの曲を編曲したもの。

第6曲　クーラント　宴会のお開きの曲で、カノンの手法を取り込んだ凝った書法がシュトラウスらしい。

第7曲　クレオントの登場　ジュルダンの娘リュシルに恋するクレオントがトルコの王子に成りすまして登場する場面。リュリの曲のアレンジで、神妙な弦合奏に始まり、軽快な木管とトライアングルの中間部を挟んで、再び最初の楽想が回帰、ここでは管・打楽器も加わり壮麗に盛り上がる。

第8曲　第2幕への前奏曲（間奏曲）（ドラントとドリメーヌ－伯爵と公爵夫人）
ジュルダンが心惹かれるドリメーヌ公爵夫人とその恋人ドラント伯爵を描く。当初は第2幕の前奏曲だったが、改訂の際に場面が移動したため間奏曲となった。様々な組み合わせの2つの楽器がソリスティックに艶めかしいデュオを奏でる。

第9曲　饗宴（食卓音楽と料理人たちの踊り）　ジュルダン主催の宴会。料理を運ぶ仰々しい音楽に始まり、多様な楽想が次々出現、出てくる料理が様々な引用（ラインの鮭がワーグナーの『ラインの黄金』、羊肉が自作の《ドン・キホーテ》の羊の場面、鳥料理が自作『ばらの騎士』中の小鳥の声の描写）で示され、後半は“料理人たちの踊り”で華やかに盛り上がる。

（寺西基之）

作曲年代：1911～17年
初　　演：1920年1月31日　ウィーン　作曲者指揮
楽器編成：フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2（第2はコントラファゴット持替）、ホルン2、トランペット、バストロンボーン、ティンパニ、小太鼓、タンブリン、トライアングル、大太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、ハープ、ピアノ、ヴァイオリン6、ヴィオラ4、チェロ4、コントラバス2

ツェムリンスキー：交響詩《人魚姫》

アレクサンダー・フォン・ツェムリンスキー（1871～1942）のこの作品は、題名からも明らかなようにハンス・クリスチャン・アンデルセン（1806～75）の童話を題材とした管弦楽曲である。

彼は1901年初めにR.シュトラウスの自作自演による交響詩《英雄の生涯》のウィーン初演を聴いたことで、交響的な標題作品への意欲を抱くようになっていた。そうした折、彼に衝撃的な出来事が降りかかる。彼と熱愛関係にあった弟子のアルマ・シンドラー(1879～1964)が知り合ったばかりのグスタフ・マーラー(1860～1911)と恋に陥り、この年の末に婚約してしまったのだ。

ツェムリンスキーが管弦楽のための標題作品に本格的に着手するのは翌1902年の2月頃だが、その題材にアンデルセンの『人魚姫』を選んだのも、人魚姫の儚い恋の悲劇に自分を重ねたからといわれる。その真偽は定かではないが、以後彼が似たような題材を好むようになることや、伝統的な色合いが強かった彼の音楽がこの作品を境に表現主義的な傾向を強めていくことを考えると、アルマとの一件が彼の作風に大きな影を落としたことは充分考えられる。着手の段階で彼は弟子アルノルト・シェーンベルク(1874～1951)宛の手紙でこれを“死の交響曲”と呼んでいることにも、当時の彼の心情が窺える。いずれにせよ《人魚姫》は彼のスタイルの転換点に位置する作品となった。

彼は当初これを2部分からなる単一楽章の作品として構想し、その内容を次のように記していた。

Ⅰ.a：海底で／b：人魚姫と人間の世界、嵐、王子の救出
Ⅱ.a：人魚姫の憧れ、海の魔女の地／b：王子の結婚、人魚姫の最期

しかし結局標題を付さない3楽章構成に変更され(第1楽章が上記のⅠ、第2楽章がⅡa、第3楽章がⅡbにほぼ相当)、1903年3月20日に全曲が完成、初演は1905年1月25日ウィーンでツェムリンスキー自身の指揮で行われた。その際タイトルは交響詩でも交響曲でもなく“管弦楽のための幻想曲”とされた。

この演奏会では同時にシェーンベルクの交響詩《ペレアスとメリザンド》も作曲者自身の指揮で初演された。シェーンベルクの作品はその斬新な響きゆえに批判が多く、ツェムリンスキーの《人魚姫》のほうが評価は高かったのだが、「愛らしい」とか「心暖まる」といった批評家の賛美は彼にとっては心外で、作品の真意が理解されなかったことに失望したようだ。1906年にベルリン、1907年にプラハでも演奏されたものの、結局彼はこれを出版せずお蔵入りとし、スコアも散逸して長い間作品は忘れ去られてしまう。

この作品が再発見されたのは1980年のことで、1984年にペーター・ギュルケの指揮で蘇演された。そして2013年にはアントニー・ボーモント校訂の新全集版楽譜も出された。本日もこの校訂版が用いられるが、この版には初演前になされた作曲

者自身による第2楽章での大幅なカット（上記の“海の魔女の地”を描いた部分）を復活させた初稿も併録している。最近はこの初稿の演奏も多くなったが、本日はカットのある改訂稿（すなわち初演の時の形）で演奏される。

作品は甘美さと錯綜とした響きが交錯する後期ロマン派らしい音調のうちに、数々の示導動機（ライトモティーフ）を巧緻に用いて、人魚姫の運命とその揺れ動く心情、苦悩を表現している。

第1楽章　きわめて適度な動きをもって（楽章の中で曲想やテンポは頻繁に変わるが、ここでは冒頭に記された発想標語を目安として掲げた／第2・3楽章も同）

低音楽器の奏するイ音（ツェムリンスキーが死の調と見なすイ短調の主音）の保続音の上に細かく揺れ動く音型が点滅する重々しい冒頭は、海底の描写。ほどなく独奏ヴァイオリンに憧憬に満ちた人魚姫の動機が示され、体は滅びるが“不滅の魂”を持つ人間への憧れが叙情的に表現されていく。やがて音楽は暗転、激しい嵐と王子の船の難破が迫真的に描かれた後、王子を救った人魚姫の、憧れと儚さが入り混じる思いを表す穏やかな終結に至る。

第2楽章　とてもよく動いて、ざわめくように　舞踏風の音楽に始まる。これを王子の舞踏会とする解説もあるが、作曲者自身の当初の説明では（アンデルセンの原作にある）海中の人魚たちの舞踏会。いずれにせよスケルツォに相当する楽章だ。初稿では途中に海の魔女を描く箇所が挟まれていた。中間で魔女の薬で人魚姫が人間に変身する様がロマンティックに描かれ（下行4度を特徴とする人間の“不滅の魂”の動機も強奏される）、その後主部が回帰する。

第3楽章　きわめて広がりをもって、苦悩に満ちた表現で　王子の結婚という現実に直面した人魚姫の、侘しさと苦悩と憧れに揺れ動く心情が、これまでの様々な動機を活用しつつ半音階的な響きを多用して描かれる。人魚に戻れる唯一の道である王子殺害も諦め、身を投げて（弦の急速な下行）海泡となる人魚姫。曲頭の海底の暗い音楽が回帰するが、全休止を挟んで一転、分割されたヴァイオリンの最弱音の響きによる“不滅の魂”の動機が彼女の救済を示唆し、浄化された終結に至る。

（寺西基之）

作曲年代：1902～03年
初　　演：1905年1月25日　ウィーン　作曲者指揮　ウィーン演奏協会管弦楽団
楽器編成：フルート4（第3、第4はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、小クラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン6、トランペット3、トロンボーン4、テューバ、ティンパニ、シンバル、サスペンデッドシンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、チャイム、ハープ2、弦楽5部

A Series

第847回 定期演奏会Aシリーズ
Subscription Concert No.847 A Series

東京文化会館

2018年1月18日(木) 19:00開演
Thu. 18 January 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

C Series

第848回 定期演奏会Cシリーズ
Subscription Concert No.848 C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2018年1月20日(土) 14:00開演
Sat. 20 January 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor
ピアノ ● ヤン・ミヒールス Jan MICHIELS, Piano */**
オンドマルトノ ● 原田 節 HARADA Takashi, Ondes Martenot **
コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

ミュライユ：告別の鐘と微笑み～オリヴィエ・メシアンの追憶に
(1992)(ピアノ・ソロ)* (4分)

Murail: Cloches d'adieu, et un sourire... in memoriam Olivier Messiaen (1992) *

メシアン：トゥーランガリラ交響曲** (75分)
Messiaen: Turangalîla-Symphonie **

Ⅰ	Introduction	導入
Ⅱ	Chant d'amour 1	愛の歌 1
Ⅲ	Turangalîla 1	トゥーランガリラ 1
Ⅳ	Chant d'amour 2	愛の歌 2
Ⅴ	Joie du sang des étoiles	星の血の喜び
Ⅵ	Jardin du sommeil d'amour	愛の眠りの庭
Ⅶ	Turangalîla 2	トゥーランガリラ 2
Ⅷ	Développement de l'amour	愛の展開
Ⅸ	Turangalîla 3	トゥーランガリラ 3
Ⅹ	Final	フィナーレ

本公演に休憩はございません

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁

演奏時間は予定の時間です。

YOUNG SEAT ヤングシート

ヤングシート対象公演（1/20）（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.49、募集はP.52をご覧ください。

お願い
演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Piano

Jan MICHIELS

ピアノ

ヤン・ミヒールス

©Myriam Devriendt

ブリュッセル王立音楽院でアベル・マティアスに、ベルリン芸術大学でハンス・ライグラフに師事。1991年、エリザベート王妃国際音楽コンクールで入賞。1996年にはフランダース音楽祭の優秀者として登録された。また2006年にはハウデン・フリューヘルス／KBC音楽賞を受賞。バッハから現代作品まで幅広いレパートリーでヨーロッパおよびアジア各地で定期的にソリストとして実績を重ねている。ブリュッセル王立音楽院教授。

Jan Michiels studied with Abel Matthys at Royal Conservatory of Brussels and Hans Leygraf at Universität der Künste Berlin. In 1991 he was laureate of Queen Elizabeth Competition. In 1996 he signed up as a festival star for Flanders Festival. Michiels regularly performs as a soloist in several musical centres in Europe and Asia. He is currently active as a piano professor at Royal Conservatory of Brussels.

Ondes Martenot

HARADA Takashi

オンドマルトノ

原田 節

©Yutaka Hamano

慶應義塾大学卒業後渡仏、パリ国立高等音楽院オンドマルトノ科を首席で卒業。日本人で初めてオンドマルトノを独奏楽器として扱い、アジア初となる講座の開設、楽器としての語彙の開発、レパートリーの拡充、後進の育成にも力を注いでいる。先進的で豊かな創作力により作曲家としての地位も確立。出光音楽賞など受賞多数。《トゥーランガリラ交響曲》では世界各国のオーケストラと共演。これまで演奏回数は20ヵ国、330回以上に及んでいる。

After graduating at Keio University, Takashi Harada entered Conservatoire de Paris to study the ondes martenot and graduated with the first prize in 1982. As a prolific ondist and composer, he has premiered more than 200 new pieces for the ondes martenot, introducing the general public to the instrument. He appears regularly as a soloist with major orchestras around the world.

ミュライユ：
告別の鐘と微笑み～オリヴィエ・メシアンの追憶に

《告別の鐘と微笑み（Cloches d'Adieu, et un sourire...）》

この飾り気のない小さな作品は、ドイツのラジオ局「ドイツ放送」からの依頼を受け、オリヴィエ・メシアンを追悼して書かれました。

オリヴィエ・メシアンの初期作品の一つであるピアノのための前奏曲《苦悩の鐘と告別の涙（Cloches d'angoisse et larmes d'adieu）》(1929) から、いくつかの素材を取り入れています（音楽語法的な処理や、別離を示す最後の3音など）。さまざまな引用を匂わせながら、私自身の作品でもたびたび登場させている鐘の音の特性も織り込みました。それらは光り輝くような残響や、明るさのある調性感を持った和音の塊によって表現されています。過去の「苦悩」と「涙」に打ち勝とうと、メシアンが晩年の作品群で「微笑み」を投げかけてくれたように。本当のお別れなど、ここにはないのです。

（トリスタン・ミュライユ／飯田有抄訳）

訳者注：「微笑み（un sourire）」とは、メシアン（1908～92）が最晩年の管弦楽作品（1991）にタイトルとして付けた言葉である。

作曲年代：1992年
初　　演：1992年7月14日　ヴィルヌーヴ＝レザヴィオン（フランス）
アカンサス・センター　ドミニク・ミィ（ピアノ）

トリスタン・ミュライユ　Tristan Murail

1947年ル・アーヴル（フランス）生まれ。国立東洋言語学校でアラビア語を学び、パリ政治学院で経済学を修め、パリ国立高等音楽院でメシアンに師事。1971年作曲を首席で卒業、同年ローマ大賞を受賞。70年代に音のスペクトル分析に基づく作曲技法を確立、《諸大陸の漂流》《記憶／浸食》《ゴンドワナ》などの作品で注目を集め、「スペクトル音楽」の先駆者の一人と呼ばれた。1980年にIRCAM（国立音響音楽研究所）に参加。コンピュータ技術を用いた音響の分析と統合の研究を進め、《デザンテグラシオン》《セレンディーブ》《流体の力学》などを作曲。オンドマルトノをはじめ鍵盤楽器奏者としても著名。2010年、武満徹作曲賞（東京オペラシティ文化財団主催）審査員を務めた。

メシアン：トゥーランガリラ交響曲

オリヴィエ・メシアン（1908 ～ 92）が、20世紀最大の作曲家のひとりであることに異を唱える人はいまい。その代表作の一つである《トゥーランガリラ交響曲》（1948）が、20世紀に生み出された楽曲の中にあってひときわ群を抜いた傑作であることも、これまた言をまたないだろう。第二次世界大戦では捕虜収容所にまで入ったことのあるメシアンが、戦争による悲惨な現実を目の当たりにしてのち、その抑圧を解放するようにして発表した大作がこの交響曲である。

1945年、名指揮者セルゲイ・クーセヴィツキー（1874 ～ 1951）がボストン交響楽団のために委嘱し、1949年12月２日にレナード・バーンスタイン（1918 ～ 90）の指揮するボストン響とメシアン夫人イヴォンヌ・ロリオ（1924 ～ 2010）のピアノ、ジネット・マルトノ（1902 ～ 96）〔電子楽器オンドマルトノの開発者モリス・マルトノ（1898 ～ 1980）の妹〕のオンドマルトノによって世界初演された。フランスではエクサンプロヴァンス音楽祭で1950年７月25日〔ロジェ・デゾルミエール（1898 ～ 1963）指揮〕、日本では1962年７月４日に小澤征爾（1935 ～）指揮のNHK交響楽団によってそれぞれ初演されている。

古代インドのサンスクリット語に由来

メシアンはクロード・ドビュッシー（1862 ～ 1918）の影響が色濃い初期の作風を経て、一時期カトリック神秘主義に基づく作品を多く発表した。その後、南米やアジアといった地域の民族音楽に触発された作品を書くようになり、とりわけペルーの音楽に基づく歌とピアノのための《ハラウィ～愛と死の歌》（1945）と、インドの音楽に題材を求めた無伴奏混声12部合唱のための《５つのルシャン》（1949）の２曲は、この《トゥーランガリラ交響曲》の外枠を構成する作品、いわば３部作をなすものとして重要な意味を持っている。メシアンはパリ国立高等音楽院の学生だった頃からインドのリズムや音律についての論文などを読み漁っており、バリ島のガムラン音楽に対する研究も加えてこうした異国への興味が高い次元に昇華されたのがこれらの作品群であるといえる。

「トゥーランガリラ」とは古代インドのサンスクリット語に由来し、一義的には「愛の賛歌」等と訳されることが多い。これは「Turanga」が時や流れといった推移する時間の概念にかかわる言葉で、転じて楽章やリズムをも表すのに対し、「Lîla」は遊戯や競技、演奏といったplayの意味を持っており、神の創造や愛の行為などのニュアンスも包含しているという解釈に基づく。ただしメシアン自身は、言葉の意味そのものを詮索されることを嫌い、むしろ音韻の響きの美しさに惹かれた命名であると強調している。ここで展開される超人的、宇宙的なまでのスケールを伴った愛の調べは、抗うことのできない宿命としての「《トリスタンとイゾルデ》の媚薬」に象徴されるとメシアンは語っている。

「ペルソナージュ・リトミック」と「逆行不能のリズム」

すぐれた音楽理論家でもあったメシアンはこの作品に対し、主要な2つのリズム上の実験的技法と、循環する4つの主題を挙げてみずから解題している。

彼が「ペルソナージュ・リトミック」と呼ぶリズム構成の手法は、ある同じリズムに則ったグループを擬人的な動きになぞらえ、異なるリズム・グループがそれぞれ舞台上で役を演じる登場人物のように独立して、またあるときは他グループの身振りに刺激されて動くといった形で、複雑な同時進行リズムに一種の人格を与えるといった考え方である。メシアンはこの曲の第5楽章で「6つのペルソナージュ・リトミックの展開を使っている」と述べた。さらにこの技法は拡大、縮小、逆行などの要素を加えられ非常に複雑な交錯をみせる。

また今ひとつの「逆行不能のリズム」という手法は、前から演奏しても後ろから演奏しても音価のパターンが同様に形成されるような“閉じたリズム”のことを指す。メシアンはこの方法論に、自然界に存在する蝶の羽や葉っぱの葉脈のデザインなどとの類似性を見出し、一種の魔術的な力を感じ取っていたようである。

循環する4つの主題

4つの主題はメシアン自身によってそれぞれ「彫像の主題」「花の主題」「愛の主題」「和音の主題」と名付けられている。

「彫像の主題」は重々しく、人々に原初的な畏怖の念を喚起させるような響き（彼はその性格を「メキシコの古代遺跡から受けるような怖れと荒々しさを持っている」と記している）を伴っており、多くはトロンボーンの強奏によって形を顕す。「花の主題」は、柔らかなクラリネットの音色で奏でられ、やや諧謔的な風合いを含んでいる。メシアンはこの主題を蘭やグラジオラス、ヒルガオなどのイメージにたとえた。「愛の主題」はさまざまに形を変えて出現するが、最も印象的なのはオンドマルトノの特徴的な音色によって空間を支配するほどの官能性を表現する場面であろう。「最も重要な主題」とメシアンが規定しているように、この長大な交響曲にあって中心的な役割を果たしている主題である。最後の「和音の主題」は少し性格を異にし、連続する和音そのものであるのだが、この“主題”が他の響きの層の中に投げかけられることによって、聴取上の力学に作用を及ぼすといった考え方に立つ。

曲は10の楽章からなる。なおメシアンは何らかの事情で全曲の演奏が不可能な場合には、代替案として第3・4・5楽章での演奏が最善であり、次いで第7・9・3楽章、そして第1・6・2・4・10楽章、それでも無理な場合は第5楽章のみによる演奏も許容している。

第1楽章　導入　激しい弦が導く序に続いて「彫像の主題」が姿を現す。やがて「花の主題」も登場し、ピアノのカデンツァを経てガムランの色彩を想起させる響きが加わり、再び「彫像の主題」で結ばれる。

第2楽章　愛の歌 1　ルフラン形式で書かれ、トランペットと打楽器による急速な要素、弦とオンドマルトノによる緩やかで甘美な要素が対照をなす。2つのクプレと1つの展開部を持つ。

第3楽章　トゥーランガリラ 1　クラリネットとオンドマルトノの神秘的な対話ののち、トロンボーンの旋律の上に金属打楽器の“ガムラン”が積み重なってゆき、やがて3部に分けられた打楽器群によって「ペルソナージュ・リトミック」の手法が具現化される。

第4楽章　愛の歌 2　9つの部分からなる。スケルツォとブリッジ、2つのトリオ、ピアノによる「鳥の歌声」やカデンツァ、「彫像の主題」などが反復と積層を形成しながらコーダへと至る。

第5楽章　星の血の喜び　熱狂的な悦楽の踊り。この楽章の基をなす主題は「彫像の主題」の変形である。中央部分では非常に複雑な「ペルソナージュ・リトミック」の展開がみられ、万華鏡的な眩惑感を増幅する。

第6楽章　愛の眠りの庭　2人の恋人が時の流れから隔離された楽園でまどろむ様子を描写する楽章。全体が「愛の主題」によって彩られている。ピアノが奏でる「鳥の歌声」はうぐいす、黒つぐみなどの鳴き声を模す。

第7楽章　トゥーランガリラ 2　いくぶん諧謔味を帯びた短いピアノのパッセージのあと、不気味な圧迫感を伴ったリズムが姿を現す。「和音の主題」や「彫像の主題」も出現するが楽章は半ば唐突に閉じられる。

第8楽章　愛の展開　ここでは「和音の主題」「花の主題」「愛の主題」が中心的に展開され、高らかに歌われる（メシアンは、ここでの「愛の主題」の爆発を「交響曲全体の頂点」だと述べている）。また「逆行不能のリズム」の上でトロンボーンとトランペットが三重のリズム・カノンを形成し「彫像の主題」を奏する。

第9楽章　トゥーランガリラ 3　17種類におよぶリズム・モードが同時進行する中、13人の弦楽器奏者の和音が持続と音色を補強する。和声がリズムに従属し、音自体もリズムの色づけ的な役割へと変化しているのが特徴。

第10楽章　フィナーレ　トランペットとホルンの壮大なファンファーレを第1主題とし、「愛の主題」による恍惚的な第2主題とを中心的に展開される。「来世からの声」（メシアン）を象徴するオンドマルトノの響きがオーケストラ全体に光と愉悦感をもたらし、第1主題に基づく圧倒的なコーダを導く。

（吉村 溪）

作曲年代：1946年7月17日～1948年11月29日

初　　演：1949年12月2日　ボストン
レナード・バーンスタイン指揮　ボストン交響楽団
イヴォンヌ・ロリオ（ピアノ）　ジネット・マルトノ（オンドマルトノ）

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、コルネット、トロンボーン3、テューバ、トライアングル、テンプルブロック、ウッドブロック、シンバル、アンティークシンバル、トルコ風小シンバル、タムタム、タンブリン、マラカス、小太鼓、大太鼓、プロヴァンス太鼓、ヴィブラフォン、鐘、チェレスタ、ジュドゥタンブル、弦楽5部、ピアノ独奏、オンドマルトノ独奏

ミュンヘン生まれ。ハノーファー音楽院で学び、チェリビダッケらに師事。1986年にドイツ音楽評議会の指揮者コンクールで優勝、翌年のタングルウッド音楽祭でバーンスタインと小澤征爾に学ぶ。これまでにザールラント州立劇場、マンハイム国立劇場、リヨン国立管、MDR響（ライプツィヒ放送響）の音楽監督、バスク国立管の首席指揮者を歴任。

ウィーン国立歌劇場、ロイヤル・オペラ・ハウス、メトロポリタン歌劇場、ドレスデン州立歌劇場、バイエルン州立歌劇場などでの華々しい活躍と同時に、クリーヴランド管、フィラデルフィア管、チェコ・フィル、ミュンヘン・フィルなどとの共演を重ねている。日本では1997年にN響を指揮してデビュー。新国立劇場、二期会、PMF、水戸室内管など数々の公演で抜群の知名度を誇っている。本公演（2月10日）で都響デビュー。引き続き東京二期会『ローエングリン』（2月21～25日／都響がピットに入る）でもタクトを執る。

Jun Märkl was born in München. He studied at Hochschule für Musik, Theater und Medien Hannover and continued to study with Celibidache, Meier, Bernstein, and Ozawa. Märkl has served as Music Director of Saarländisches Staatstheater, Nationaltheater Mannheim, Orchestre National de Lyon, and MDR Sinfonieorchester. He was formerly Principal Conductor of Basque National Orchestra and Pacific Music Festival (Japan). Märkl has appeared at Wiener Staatsoper, Royal Opera House, Metropolitan Opera, Semperoper Dresden, Bayerische Staatsoper, among others, and has performed with many of orchestras including Cleveland Orchestra, Philadelphia Orchestra, and Czech Philharmonic.

P Promenade

プロムナードコンサートNo.376

Promenade Concert No.376

サントリーホール

2018年2月10日(土) 14:00開演

Sat. 10 February 2018, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● 準・メルクル Jun MÄRKL, Conductor
チェロ ● エドガー・モロー Edgar MOREAU, Violoncello
コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

メンデルスゾーン：序曲《フィンガルの洞窟》 op.26 (11分)

Mendelssohn: "Fingal's Cave", Overture, op.26

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 ロ短調 op.104 B.191 (40分)

Dvořák: Cello Concerto in B minor, op.104 B.191

Ⅰ Allegro
Ⅱ Adagio ma non troppo
Ⅲ Finale: Allegro moderato

休憩 / Intermission (20 分)

シューマン：交響曲第3番 変ホ長調 op.97 《ライン》 (33分)

Schumann: Symphony No.3 in E-flat major, op.97, "Rheinishe"

Ⅰ	Lebhaft	生き生きと
Ⅱ	Scherzo: Sehr mäßig	スケルツォ／とても中庸に
Ⅲ	Nicht schnell	急がずに
Ⅳ	Feierlich	荘厳に
Ⅴ	Lebhaft	生き生きと

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

YOUNG SEAT ヤングシート

ヤングシート対象公演 ヤングシート対象公演(青少年を年間500名ご招待)協賛企業・団体はP.49、募集はP.52をご覧ください。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violoncello

Edgar MOREAU

チェロ

エドガー・モロー

©Julien Mignot

1994年パリ生まれ。パリ国立高等音楽院とクロンベルク・アカデミー（ドイツ）で学ぶ。2009年ロストロポーヴィチ国際チェロ・コンクール「最も将来性のある若手奏者」賞、2011年チャイコフスキー国際コンクール第2位および現代作品最優秀演奏家賞を受賞。これまでにゲルギエフ、ソヒエフ、カサドシュらの指揮で、マリインスキー劇場管、フランス国立管、トゥールーズ・キャピトル国立管、サンクトペテルブルク・フィル、スイス・ロマンド管などのオーケストラと共演。演奏楽器は1711年ダヴィッド・テヒラー製チェロ。

Edgar Moreau was born in 1994 in Paris. He studied at Conservatoire de Paris and Kronberg Academy. At Rostropovitch Cello Competition in 2009, he received the Prize for the Most Promising Contestant. Moreau won the 2nd Prize at International Tchaikovsky Competition in 2011. He has performed with orchestras including Mariinsky Orchestra, Orchestre National de France, Orchestre National du Capitole de Toulouse, St. Petersburg Philharmonic, and Orchestre de la Suisse Romande under batons of Gergiev, Sokhiev, and Casadesus. Moreau plays a David Tecchler cello, dated 1711.

メンデルスゾーン：序曲《フィンガルの洞窟》op.26

裕福な銀行経営者の長男として、ドイツのハンブルクに生まれたフェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）。自宅のサロンに芸術家や学者が日常的に出入りする環境のもとで深い教養を身につけながら育ち、音楽の分野では神童の才を認められた。そんな彼を“我々の世のモーツァルト”と呼んだのは誰あろう、ローベルト・シューマン（1810～56）である。

1829年の4月、メンデルスゾーンはイギリスに初訪問を果たした。彼の名が既に“若き大家”として知れわたっていたロンドンでは、自作を交えた演奏会を指揮して大喝采を受ける。

7月中旬にロンドンを離れた後、彼は友人とスコットランド旅行に出かけた。同地方の西海岸沖に広がるヘブリディーズ諸島の玄関口となるマル島まで足をのばしたのが8月7日。その夜、姉ファニー（1805～47）宛にしたためた手紙には「僕がどれほど感銘を受けているか、頭に浮かんだものをお目にかけましょう」という言葉とともに、現在の《フィンガルの洞窟》の冒頭部分にあたる楽想が書き記されている（通説とは異なり、洞窟そのものを見る前に楽想を得ていたらしい）。マル島から約10キロ西方のスタファ島で、フィンガルの洞窟として名高き景勝地に降り立ったのは翌日のことである。高さ十数メートルの壁を埋め尽くす六角柱状の玄武岩。洞窟内にこだまする波や風の音……。

こうした印象も霊感の源泉としながら、翌年の秋以降にメンデルスゾーンは演奏会用序曲の筆を進めていく。作品は1830年12月16日に完成したが、その後の改訂を経て初演を迎える過程でタイトルは二転三転。1835年の出版時には《ヘブリディーズ諸島（Die Hebriden）》に落ち着き、しかしそれはなぜかパート譜にのみ印刷され、スコアは《フィンガルの洞窟（Fingals-Höhle）》と題名を掲げていた。後者が通称として用いられることも多く、日本では古くからその形で定着を見ている。

ソナタ形式で書かれた曲は、序奏などを伴わずにいきなり第1主題から始まる。そのどこか荒涼とした空気感に対して、温もりを備えた動機群に導かれる第2主題が実に鮮やかなコントラストをおりなす。そしてほぼ全曲を一貫して、旋律声部の背後で長い持続音や起伏の細かい伴奏音形が鳴り響き、それが潮風や波のうねりを連想させずにはおかない。メンデルスゾーンの作風に批判的だったリヒャルト・ワーグナー（1813～83）ですら、「音による風景画として第一級」と讃辞を呈したほどである。

（木幡一誠）

作曲年代：1830年　1832年改訂
初　　演：1832年5月14日　ロンドン
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 ロ短調 op.104 B.191

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は50歳を過ぎた1892年秋から2年半あまり、ニューヨークの私立ナショナル音楽院の院長と作曲科教授に就任し、その間に交響曲第9番《新世界より》、弦楽四重奏曲第12番《アメリカ》、そしてこのチェロ協奏曲を矢継ぎ早に創作している。彼はニューヨーク東17番通りに住み、多忙な仕事の合間を縫ってしばしば港や駅を訪れ、船や機関車を見に行っていた。しかしそうした“最先端のシティ・ライフ”を楽しむかに見えた日常生活も、チェコへの郷愁が募りホームシックに苛まれていた。

とはいえ環境の変化から生まれたノスタルジックな心境が創作への原動力のひとつとなっている。これらの名作に現れる抒情的な楽想などには、故郷を想い焦がれる彼の赤裸々な胸の内が吐露されているといっても過言ではないだろう。一方、黒人霊歌やアメリカ・インディアンの民謡など“新たな音楽との遭遇”も特筆すべきで、その特長や要素を巧みに取り入れながら作品に反映させていったドヴォルザークの筆法は、さらなる音楽の独自性と魅力へと直結し開花している。

チェロ協奏曲はそうした“アメリカでの所産”の最後にあたるもの。創作の間接的な要因としては献呈者でもある同郷のチェリスト、ハヌシュ・ヴィハーン（1855～1920／渡米前にボヘミア地方を共に演奏旅行した）との思い出が影響しているとされる。創意豊かな旋律はいうまでもないが、アメリカの民族音楽に感化された影響も彼が愛したボヘミアの民族音楽同様、直接引用したりすることはなく、あくまで“民謡の精神的影響”のもとに生成されているところに真価がある。加えて熟達した管弦楽書法と密接に結びついた表現と構成が、圧倒的な説得力を生んでいる。

第1楽章　アレグロ　ロ短調　ソナタ形式。いきなり暗鬱なクラリネットの旋律で開始される第1主題。それと対照的にのどかなホルンによる第2主題が登場したのち、朗々とカデンツァ風に独奏チェロが登場する。展開部は短めで再現部は第2主題で始まり、やがて第1主題も現れ華やかな独奏の展開を交えて雄大なコーダで締めくくられる。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ　ト長調　三部形式。ボヘミアへのノスタルジーが込められた抒情的な緩徐楽章。牧歌的な旋律主題がクラリネットにより始められる。中間部はト短調による哀愁に満ちた情熱的な楽想が展開される。

第3楽章　アレグロ・モデラート　ロ短調　自由なロンド形式。高揚感に溢れる溌剌としたロンド主題が印象的。歌謡的で優しい楽想や民謡風の楽想を交互に差し挟みながら、終盤では第1楽章第1主題を回想して最後は力強く終わる。

（齋藤弘美）

作曲年代：1894～95年　1895～96年改訂
初　　演：1896年３月19日　ロンドン　レオ・スターン独奏　作曲者指揮
楽器編成：フルート２（第２はピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン３、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、トライアングル、弦楽５部、独奏チェロ

シューマン：交響曲第３番 変ホ長調 op.97《ライン》

1840年のクララ（1819～96）との結婚以後、幸福な日々を送っていたローベルト・シューマン（1810～56）だったが、もともと神経が敏感であった彼は次第に精神的に不安定になる。1844年には一時ひどい鬱状態に陥ったこともあって、この年の終わりにそれまで本拠としていたライプツィヒからドレスデンに移住した。ここで心機一転した彼は、対位法の研究に熱心に取り組むなど、創作意欲を回復する。名作・ピアノ協奏曲が成立したのもまさにこのドレスデンにおいてであり、心身ともに波はあったものの、このドレスデン時代はシューマンの作風に新境地をもたらすこととなった。

そうした中、シューマンは1849年11月に友人である作曲家・指揮者のフェルディナント・ヒラー（1811～85）から手紙を受け取った。自分の後任としてデュッセルドルフ市の音楽監督に推薦したいという内容だった。オーケストラを管理統率しなくてはならないという点に不安を感じたシューマンはしばらく回答を保留するが、ちょうどどこかのポストを得たいと考えていた矢先のことだったし、また非常に良い条件が提示されたこともあって、結局これを受諾することにし、1850年９月デュッセルドルフ市音楽監督に就任する。着任当初の彼は積極的に仕事に取り組み、また一方で自分のオーケストラを得たことやライン河に臨むこの町での生活といった環境の変化は、彼の創作力も刺激することとなった。

特に着任後ほどなくすぐ南のケルンを訪れたことはシューマンに大きな創作の霊感を与えることとなった。これが直接のきっかけとなって、11月初めから１ヵ月あまりのうちに彼は新しい交響曲を書き上げる。それが、シューマン自身「ライン地方の生活の情景」と呼び、「民衆的な要素に支配されている」と述べたという交響曲第３番である。

とはいってもこれは決してラインの情景を描写的に扱った作品ではなく、ライン地方での新しい生活に喜びを見いだした当時のシューマンの心の表現としての交響曲として捉えるべきだろう（ちなみに《ライン》という題そのものは彼自身によって付けられたものでない）。新天地で気分を一新したシューマンの創造力の高まりが現れ出た明朗な気分溢れる傑作である。

なお当初は４楽章構成の作品として書き進められたようだが、ほぼ全体が出来

上がりつつあった段階で、ケルンのドームにおいて大司教ヨハネス・フォン・ガイセル（1796～1864）の枢機卿昇任式が執り行われたことを聞いたシューマンは、厳粛な儀式を思わせる楽章を第４楽章として追加した。こうして結局５つの楽章を持った破格の構成による交響曲として完成されたのである。初演は1851年２月６日デュッセルドルフにおいてシューマン自らの指揮によって行われている。

第1楽章　生き生きと　変ホ長調　４分の３拍子。ヘミオラのリズムによった力感溢れる第１主題によって開始される。ト短調で出る第２主題が幾分メランコリックな気分を醸すが、全体的には勢いに満ちて運ばれる堂々たるソナタ形式楽章である。

第2楽章　スケルツォ／とても中庸に　ハ長調　４分の３拍子。スケルツォと銘打たれているが、ヴィオラ、チェロ、ファゴットによって示される親しみやすい主要主題はレントラー風の性格のもの。その点に前述のようなシューマンの言う民衆的な要素が感じられるが、きわめてポエティックな趣がそこに漂うところが彼らしいといえよう。

第3楽章　急がずに　変イ長調　４分の４拍子。穏やかさのうちにロマン的な憧憬の気分を湛えた楽章。クラリネットとファゴットが奏する主要主題は、付点リズムと跳躍進行の多い起伏に富んだ旋律でありながら性格的には牧歌的な叙情に満ちている。続いて第１ヴァイオリンに出る軽やかで幸福そうな楽想は以後この楽章を通じて執拗に現れる。中間部でファゴットとヴィオラに出る主題は、主部主題と違って順次進行によるなだらかなもの。

第4楽章　荘厳に　変ホ短調（調号は変ホ長調）　４分の４拍子。上述したようにケルンの大聖堂で行われた大司教の枢機卿昇任式に関連するというコラール風の主題によった荘重な緩徐楽章で、シューマン自身自筆譜に「荘厳な儀式の性格で」と記した。前の楽章までは用いられなかったトロンボーンの響きがこの楽章の厳かさを強めている。

第5楽章　生き生きと　変ホ長調　２分の２拍子。明るい躍動感に溢れるソナタ形式のフィナーレで、シューマンの言う民衆的な喜ばしさを感じさせるが、リズム的には彼らしく錯綜したところが多い。展開部ではホルンの新しい楽想が高揚感をもたらし、またコーダでは第４楽章の厳粛な主題が壮麗で明るい性格のものに変容されて出現して最後のクライマックスを導く。

（寺西基之）

作曲年代：1850年
初　　演：1851年２月６日　デュッセルドルフ　作曲者指揮
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦楽５部